



日本における宗教と空間，社会をめぐる地理学的研究

阪野，祐介

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

2007-03-25

(Date of Publication)

2011-12-13

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4127

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004127>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	阪野 祐介
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学 位 記 番 号	博い第 24 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 19 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

日本における宗教と空間，社会をめぐる地理学的研究

審 査 委 員

主 査	教 授	長谷川 孝治
	教 授	油井 清光
	准教授	大城 直樹

論文審査の結果の要旨

氏 名	阪 野 祐 介	
論 文 題 目	日本における宗教と空間、社会をめぐる地理学的研究	
要 旨		
<p>本論文は、日本において宗教と社会がそれらの関係性のなかでいかなる空間的構造を形成するのを中心テーマとして、それを多数の文献渉猟と新潟県、京都府、島根県など、各地におけるインテンシブなフィールドワークを駆使して解明した画期的な論攷である。その目的は、宗教と社会が相互にいかに影響しあっているのか、またその関係性のなかで聖なる空間はどのように形成されるのかを分析することであり、つぎの3つが主要視点とされる。第1は、宗教受容の過程における政治的・社会的・文化的背景や布教する側の主体の行動、さらには受容する側の人びとの社会的関係である。また第2は、宗教が有する諸集団の紐帯の強化や差異化機能が政治的・イデオロギー的に利用される場面に着目し、宗教的儀礼が国家的儀礼としてどのように創出され、いかなる社会的影響を及ぼすのかである。さらに第3として、聖なる空間としての信仰者が集う巡礼地が、多様な集団がその場所のもつ固有の記憶を共有する装置として整備されていくプロセスに注目し、聖なる場所の構築性を解明することである。以上の3つの視点が有機的に関連づけられながら展開されており、日本における新しい宗教地理学の地平を開拓する論攷として高く評価できる。</p> <p>本論文は5章から構成される。</p> <p>第1章においては、近代地理学から現代地理学への潮流における宗教地理学の動向が綿密な文献調査によって追究されている。戦後のD. E. Sopherによる新しい宗教地理学の提唱以降が分析の中心となつてはいるが、とりわけ1990年代以降のL. KongやC. C. Parkらによって提示された新たな研究のフレームワークに注目して、宗教地理学における研究領域を分類整理し、その成果と課題を批判的に検討している。そのうえで、本論文の主要3視点に関連した近年の動向を綿密にレビューし、宗教と社会・空間の問題をより深く洞察する方向性を鮮明に主張している。</p> <p>第2章および第3章では、宗教の受容がテーマとなる。第2章では、新潟県八海山の山岳信仰を対象として、信仰の空間的拡散が分析されるが、そこでは崇敬者名簿や霊神碑など、丹念なフィールドワークで獲得した独自の史資料を基礎にして、信仰の分布構造が形成されるプロセスを布教者に焦点をあてて解明されている。その結果、従来の信仰圏研究で提示されてきた単一の同心円構造の問題点を指摘し、分布構造に豊かな地域性・多様性が存在することを明らかにしている。また第3章では、地域社会において新たな宗教が受容される際に、そこに存在するさまざまな社会的諸関係がどのように影響を及ぼしたかを追究している。つまり第2章が布教する側を中心とした考察であるのに対して、本章では京都府旧佐賀村における戦後直後のカトリックへの集団改宗をテーマとして取り上げ、受容する側の社会的関係に重点が置かれる。まず、地縁の関係・血縁の関係と改宗パターンの関連性が検討され、また社会的諸集団と宗教との関係や宗教のもつ連帯性の強化や他者との差異化機能、あるいは社会的関係が宗教に及ぼす影響が分析される。さらに新たな宗教の受容が宗教的行為にいかに影響を与えるのかという問題にも言及している。これらにより、儀礼や装置、教義によって規定される宗教体系において、成文化されたものの分析を通して、空間、社会の宗教的構造を明らかにする意味が明示されるのである。</p>		
主 査 記 載 氏 名 ・ 印		長谷川 孝治

第4章では、宗教と政治の関係へとテーマが発展していく。本章では、カトリックが1949年に日本を縦断しながら展開したザビエル渡来400年祭が事例とされ、就中この行事が非継続的・一時的な宗教的行事であり、宗教的空間の創出であることに焦点が当てられる。そうした非日常的な時間・空間が戦後直後の人びとの間でいかなる意味を有し、どのように認識、認知されたのかを、主に当時の新聞記事の広範な渉猟によって解明されている。GHQ統治下においては、独自の宗教政策とキリスト教支援によって、精神的支配として日本のキリスト教化を目指すことが重要な政策のひとつであった。一方、カトリック側では、ザビエル祭を通して日本各地で「奇跡の右腕」の顯示・行列を実施し、また記念碑の建立や教会の復興といった宗教的行為を契機として、宗教的拠点の空間的な拡大・整備を目論んでいた。つまり、宗教的行事・儀礼の空間が宗教独自の世界観の表現であるとともに、宗教のもつ象徴性と国家形成における宗教の象徴的利用という双方向の関係が展開されたのである。

第5章では、構築主義的立場に立ち、津和野のキリシタン巡礼地を対象事例として、多様な主体によりいかに津和野が巡礼地として形成・整備されたかが、明治初期のキリシタン迫害からの歴史的変遷のなかで検討される。キリシタン流刑地としての津和野は、明治維新前後の国家神道の形成とも関係深い場所であり、その結果として津和野においてキリシタン拷問が行われ、殉教地乙女峠に係わるさまざまなモチーフ（拷問・殉教・マリア出現など）となる歴史的出来事が継続的に発生した。その後、カトリック司祭による津和野調査によって殉教地乙女峠が「発見」され、巡礼地としての整備、つまりシンボル化へのプロセスが進行した。その過程においてカトリック信徒による巡礼行動が創出され、巡礼者の増大によってカトリック巡礼地として広く認知されることになる。この巡礼という行動自体が、巡礼地を維持する構造に変化を生じさせ、巡礼地の発見から、整備の主体となった神父や地元の情報者の活動と、地域外のカトリック信者の巡礼という宗教的行為との関係性の中で、巡礼地という場所が構築されていったと、主張されるのである。

全体を通じて、日本における宗教と空間、社会を巡る関係性という広範なテーマを、文献調査と現地調査を有効に活用しながら分析しており、斬新な視点で宗教を社会地理学的及び文化地理学的に解明して、新たな宗教地理学の地平を切り拓く論文であると位置づけることができる。また本論文が断学の発展に大いに寄与していることは学界でも広く認識されている。その一方で、統合的な一般理論化の可能性を秘めているにも拘わらず、本論文では躊躇されていることが大いに惜しまれるが、今後は大胆なマクロモデル構築へと研究を深化、展開していくことを期待したい。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は、論文提出者 阪野祐介 が博士（文学）の学位を授与されるにたる資格を有するものと判断した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名
主 査	教 授	長谷川 孝治
副 査	教 授	油井 清光
副 査	准教授	大城 直樹

宗教学者の岸本英夫は、「目に見えない神が実在するかどうかという問題と、人が神の実在について、どのような思想をもっているかという問題」とがそれぞれもつ性格の違いを指摘し、両者間の差異を明確に認識する重要性を主張する。すなわち、人が神の存在に対して、それぞれの思想をもつことが人間のいとなみに含まれるひとつの現象であるということから、宗教が研究の対象としてなりえるのである。同様に、「宗教体験」もまた、それ自体は個人的な信仰に基づく心のなかの問題であるが、その信仰にともなって生じる行為やさまざまな実践もまた人のいとなみのひとつであり、研究対象の範疇に含まれるものとなる。

地理学においても、宗教地理学に重要な意義ある展望を示したソーファーが、「(宗教とは)信仰と礼拝の体系、すなわち……制度化された聖なる信念と儀礼と社会的行為の体系である」という定義に依拠し、組織化された宗教体系と、文化体系によって形造られた制度化された宗教行動をもって、それらが空間的に、景観上にあるいは社会との関係のなかで相互に関連しあっているのかを問うことで、宗教を地理学の研究対象とすることができると提言している。

聖なる空間、場所、ものと人が感じられるのは、宗教的な「人のいとなみ」が介在することによって場所の神聖性が顕れるものと考えられる。ここで、宗教と空間、場所に深く関係する「聖なるもの」をめぐる議論の概観を整理する。聖なるもの、さらには聖なる場所のとりえ方に大きく2つの視点に分類することができる。ひとつは、聖なるもの実在性に立つ視点である。エリアーデは、聖なる空間とは、「人間が選択するもの」ではなく、聖なるものがその場所を聖別化し、それを人間に「発見される」だけであるとする。彼はヒエロファニーという造語をあてて、「聖なるものとは力であり究極的にはとりもなおさず実在そのものを意味する」とした。そのため、その場所へは人のいかなる行為も関係なく聖なる空間であるという。しかしながら、宗教現象を人びとのいとなみとしてとらえるならば、宗教現象が出現する空間である聖なる空間もまた人びとのさまざまな行為の影響を受けると考えられる。この点に関してはエリアーデも、「宗教的体験には、経済的・文化的ならびに社会的相違、一言でいえば、歴史に基づいて説明される差異がある」と言及している。

もうひとつの聖なる場所をとらえる立場として構築主義的視点による聖なるもの・場所への言及があげられよう。リーチの主張に従えば、聖地とは「人間がつくった世界の象徴的秩序化」のひとつであるとしている。そして、リーチは聖と俗の境界に注目し、「ある種の事物や行為を他のものから区別してひとつの組に分類するため、われわれは象徴を用いるが、その際、「自然のまま」の状態にあってはもともと切れ目のない連続体である場のさなかに、われわれは人工的な境界をあれこれと創りだしている」とした。つまり聖なるものとは、とりもなおさず存在するのではなく、社会的時間や空間の文節化のなかで象徴として存在するものとなる。構築主義的立場に立つならば、聖なるものの真贋を問うのでは

なく、この聖なるもの、象徴的なものとして区分する境界というものが生み出されていくそのプロセスを問うのであり、そのプロセス自体が文化であるという理解となる。

ところで、地理学における文化をめぐる議論のなかで、ミッチェルが次のように述べている。「われわれは、文化は実在しないと認識することにより、文化観念が生産と再生産の社会的関係のなかで、もしくはそれを通してどのように存在しているのか、ということを理解するための困難なプロセスを始めることができる。われわれは、誰が「批判的な組織形態」を構成し、誰がいつ何時に「文化」を物象化するイデオロギー的な作業を行うのか、ということをとらえることができる」と。つまりは、宗教が文化的現象のひとつとしてとらえるということは、文化が本来社会性を帯びたものであり、社会関係のなかにある人びとのいとなみと、そのいとなみの結果として生産、再生産されるものとの相互作用の過程そのものとしてとらえる必要性を意味するのである。

このように宗教をとらえると、宗教と空間、社会との関係において考えるならば、制度化・体系化された教義や儀礼、集団、さらに個人の宗教的体験もまた、多様な社会的関係のなかで常に生産・再生産のプロセスにあるといえよう。またこのプロセスは、ある宗教と対外的社会的関係における相互関係、つまりは統合や分離、競合、調停のみを意味するものではなく、同一の宗教内における集団内の人びとの関係内に存在するものでもある。そして集団のこうした政治性が、教義や儀礼、集団、体験といった構成要素の連関した絶え間ない変化を生み出すのである。

以上のように、「宗教とは何であるのか」という問いへの回答を導くためには、「宗教」を形成するそれら諸現象を多面的にとらえていくことがとなる。そして、宗教的世界観のような抽象的観念がいかに物質的に表象化されているのかを明らかにすることも重要であるが、しかし本論文で明らかにしたいことは、その表象化される過程に焦点をあてることである。すなわち、抽象的観念の表象化過程にひそむ多様な人びとの関わりにとくに注目することを意味する。

こうした問題意識から、本論文では宗教と社会との関係のなかでいかなる空間的構造を形成するのかについていくつかの側面から考察する。その目的は、宗教が社会とどのように影響しあっているのか、またその関係のなかで聖なる空間とはどのように形成されるのかを明らかにすることである。第1に、宗教受容の問題である。その過程における政治的・社会的・文化的背景との関係や布教する側の主体の行動、さらには受容する側の人びとの社会的関係のなかでどのように宗教が受容されていくのかを明らかにした。第2に宗教がもつとされる諸集団の紐帯の強化や差異化機能を、政治的・イデオロギー的に利用する場面に注目し、宗教的儀礼が国家的儀礼としてどのように創出され、いかなる社会的影響を及ぼすのかを明らかにする。そして第3に、聖なる空間として信仰者が集う巡礼地が、多様な集団がその場所のもつ固有の記憶を共有する装置として整備されていく過程に注目し、聖なる場所の構築性を明らかにする。

まず第1章において宗教地理学の動向を追うことにする。主としてソーファーによる提唱以降を取り上げるが、なかでも1990年代以降のKongやParkらによって提示された宗教地理学の新たな展望を取り上げながら、宗教地理学における研究領域をいくつかに分類しその概観を明らかにする。そのうえで、本稿で扱う3つの視点に関連した項目での動向を整理し、宗教と社会・空間の問題として考察をすすめていく視点、課題、問題設定をより具体的に示したい。

第2章および第3章では、宗教の受容を取り上げる。第2章では、山岳信仰を対象として、信仰の空間的広がりに関して考察を行う。そこでは、信仰の分布構造が形成されるプロセスを布教者に焦点をあてて明らかにしたうえで、従来の信仰圏研究で示された同心円構造の問題点を指摘し、分布構造の地域性・多様性について言及する。第3章では、地域社会において新たに宗教が受容される際に、そこに存在するさまざまな社会関係がどのように影響を及ぼすかを解明した。つまり第2章が布教する側を中心とした考察であるのに対して、本章は、京都府旧佐賀村の集団改宗を取り上げ、受容する側の社会的関係に注目した。地縁の関係、血縁的关系と改宗パターンの関連性を検討する。社会的諸集団と宗教との関係について言及し、宗教のもつ連帯性の強化や他者との差異化機能、あるいは社会的関係が宗教を及ぼす影響を示す。また、新たな宗教の受容が宗教的行為にいかに関与を及ぼしているのかという問題にも着目する。そのことにより、儀礼や装置、教義によって規定される宗規体系において成文化されたものの分析を通して、空間、社会の宗教的構造を明らかにすることが可能となろう。

第4章では、宗教と政治との関係に言及する。このテーマでは、カトリックが1949年に日本を縦断しながら展開したザビエル渡来400年祭を事例とする。焦点となるのは、この行事が、非継続的・一時的な宗教的行事であり宗教的空間の創出であるという点である。そうした非日常的な時間・空間が当時の人びとの間でいかなる意味をもち、どのように認知されたのかを探る。GHQ 統治下において、宗教政策とキリスト教支援により精神的側面での支配として日本のキリスト教化があった。一方で、カトリック側においては、ザビエル祭を通して、日本各地での「奇跡の右腕」の顕示・行列を行ない、記念碑の建立や、教会の復興といった宗教施設建設の契機となり、宗教的拠点の空間的な拡大・整備を行っている。つまり、宗教的行事・儀礼の空間が、宗教独自の宗教的世界観の表現であるとともに、宗教のもつ象徴性と国家形成における象徴的な利用という双方向的関係が読み取れよう。

第5章では、構築主義的立場に立ち、津和野のキリシタン巡礼地を取り上げ、多様な主体によりどのように巡礼地として形成・整備されていくかを、明治初期のキリシタン迫害からの歴史的変遷のなかで、巡礼地としてのいかに展開していくかをとらえる。

キリシタン流刑地としての津和野は、明治維新前後の国家神道の形成と関わりの深い場所であり、その津和野においてキリシタンの拷問が行われた。殉教地乙女峠にまつわるさ

まざまなモチーフ（拷問・殉教・マリア出現など）となる歴史的出来事が生じる。その後、カトリック司祭による殉教地津和野の調査によって、殉教地乙女峠が「発見」され、巡礼地としての整備、つまりはシンボル化の過程がみられる。その過程において、カトリック信徒による巡礼行動を生み出し、その巡礼者の増大、巡礼地としてひろく認知されることになる。この巡礼という行動が巡礼地という場所を維持する構造に変化を生じさせると考えられる。つまり、巡礼地の発見から整備の主体となった神父や地元の信者らの活動とその地域外の信仰者の巡礼という宗教的行為との関係を巡礼地という場所は内包しているといえるのである。